

第24期日本学術会議化学委員会高分子化学分科会（第5回）議事要旨

日時：令和元年12月26日14:30-15:25

場所：日本学術会議 6階6-C(2)会議室

（以下敬称略）

出席者：（第三部会員）君塚信夫、（連携会員）伊藤耕三、上垣外正己、岸村顕広、栗原和枝、小林定之、佐々木園（記録）、高原淳、中條善樹、原田明、藤田照典、八島栄次、吉江尚子

欠席者：（第三部会員）片岡一則、（連携会員）澤本光男、三浦佳子

議題：

1. 前回議事要旨案の確認と承認

前回議事要旨案の確認を行い承認した。

2. 海洋プラスチックについて

(1) The Chemical Sciences and Society Summit (CS3) 報告 【高原委員】

- 11月10-13日 Burlington House, London, England
- テーマ：New plastics, recycle, degradation, 環境負荷(environment load)
- England, Japan, China の化学会による少数参加者による密な会議
- 日本からの参加者：佐藤浩太郎 東工大、吉岡敏明 東北大、
沼田圭司 理研、澤本光男 JST、高原淳 九大・JST、
日向博文 愛媛大
- White Paper が3-4月にweb公開予定。
- プラスチック問題に関する議論が進むについて、高分子の分解、環境影響など関連する科学的なデータ不足の認識が強まっており、関連分野の基礎化学が必要である。
- 学際的問題であるため、全体を把握できる研究者の育成も必要である。

報告の後、委員間で国内外の動向や、分析の難しさ、マイクロプラスチックの発生源などについて、幅広く議論した。

(2) World Science Forum 報告 【岸村委員】

- ・ 日本からの参加者(日本学術会議からの派遣)：
岸村(高分子化学)、安田(海洋生物学)、馬奈木(経済学)
- ・ 海洋環境汚染の問題に関連して、SDGs (Sustainable Development Goals (持続可能な開発目標)) の目標達成に向けて生じるゴール間の衝突、異なる立場間での衝突について議論。
- ・ 岸村委員の発表内容：日本がアピールできる点としてのゴミのマネジメント技術を例に、各国の状況・文脈を踏まえた議論の場の必要性→全体として折り合いをつけるための手法を確立する必要がある。科学者側の取り組む態度にも改善の余地があるが、科学的助言を目指すにしても相応の支援がないと研究者自身には取り組みにくい。
その後の議論まとめ(馬奈木博士による): 科学技術のみ、あるいは、規制のみで問題は解決しない、産業界にインセンティブを付けて市場をうまく利用する形で問題解決に向かわせる必要がある、科学的な厳密性・誠実性が科学的助言には最も重要、不完全なデータしかない状況では危険性(考えられる最悪のシナリオ)を確実に伝えるデータの取得が急務、であるとの意見が出た。また政策的観点では、未知の脅威があるものについては早急なアクションが必要であり、民間と公共機関の双方で研究・開発が進むようなサポートをする、価値観と行動を変える行動規範と倫理規範構築の促進させる、社会に関係させるための科学調査委員会の設置する、市民に浸透しやすいシンプルな指標を設定する、などの意見が出た。
- ・ 他に ASEAN、ドイツの研究者から発表。

報告の後、小林委員を中心に産業界での動向などを議論した。

最後に、分科会による意見表出について議論した。その結果、現状は科学データが不足しており、多様な意見があることなどから、今期中の意見表出は見送ること、今後も議論を継続することが確認された。

3. 高分子化学の最近の状況について

- ・ 大型研究計画(マスタープラン)などについて、幅広く議論した。